

科目名	生体防御機能解析学講義			分野・必選別 単位数	専門科目 (臨床検査技術学)	選択	2単位
科目責任者	◎教授 鈴木幸一 教授(兼) 榎村浩一 講師 黒田雅頭						
課程	博士前期	配当年次	1年	配当学期	前期	授業方法	講義
授業の概要	病原体が生体に侵入したときに起こる免疫応答は生体防御の枢軸をなすが、新型インフルエンザのように過度の応答を引き起こすことがあり、病態生理の文脈の中で生体防御機構を理解することが大切となっている。そのような視点での免疫系の理解を深めるとともに、免疫自体が異常となるアレルギー疾患の診断や輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、生物学領域における獨創性に富む科学概念の創出、新しい方法や技術の開発をめざす。						
授業の到達目標	①自然免疫分野および自己免疫系疾患について概説できる。 ②分子免疫学分野の用語を説明できる。 ③自然免疫の分子メカニズムとともに、個体間で免疫応答の強度の違いとその背景を説明できる。 ④感染や組織傷害などの幅広い事象によって自然免疫系が活性化する現象と、それが疾患の発症に与える影響を説明できる。 ⑤さまざまなアレルギー疾患の診断や輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査の新しい展開を説明できる。						
授業計画	回数	担当者		行動目標			
	1	鈴木 幸一	教授	自然免疫分野および自己免疫系疾患についての最近の総説を通読する。分子免疫学分野の用語を説明できる。①			
	2	鈴木 幸一	教授	自然免疫分野および自己免疫系疾患についての最近の総説を通読する。分子免疫学分野の用語を説明できる。②			
	3	鈴木 幸一	教授	自然免疫分野および自己免疫系疾患についての最近の総説を通読する。分子免疫学分野の用語を説明できる。③			
	4	鈴木 幸一	教授	自然免疫分野および自己免疫系疾患についての最近の総説を通読する。分子免疫学分野の用語を説明できる。④			
	5	鈴木 幸一	教授	自然免疫の分子メカニズムとともに、個体間で免疫応答の強度の違いがどのような背景であるかを説明できる。①			
	6	鈴木 幸一	教授	自然免疫の分子メカニズムとともに、個体間で免疫応答の強度の違いがどのような背景であるかを説明できる。②			
	7	鈴木 幸一	教授	自然免疫の分子メカニズムとともに、個体間で免疫応答の強度の違いがどのような背景であるかを説明できる。③			
	8	榎村 浩一	教授(兼)	感染や組織傷害などの幅広い事象によって自然免疫系が活性化する現象を包括的に理解し、それが疾患の発症にどのような影響を及ぼし得るかについて説明できる。①			
	9	榎村 浩一	教授(兼)	感染や組織傷害などの幅広い事象によって自然免疫系が活性化する現象を包括的に理解し、それが疾患の発症にどのような影響を及ぼし得るかについて説明できる。②			
	10	黒田 雅頭	講師	さまざまなアレルギー疾患の診断や輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査の新しい展開を説明できる。①			
	11	黒田 雅頭	講師	さまざまなアレルギー疾患の診断や輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査の新しい展開を説明できる。②			
	12	黒田 雅頭	講師	さまざまなアレルギー疾患の診断や輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査の新しい展開を説明できる。③			
	13	黒田 雅頭	講師	さまざまなアレルギー疾患の診断や輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査の新しい展開を説明できる。④			
	14	黒田 雅頭	講師	さまざまなアレルギー疾患の診断や輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査の新しい展開を説明できる。⑤			
15	黒田 雅頭	講師	さまざまなアレルギー疾患の診断や輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査の新しい展開を説明できる。⑥				
事前事後学修の内容およびそれに必要な時間	【事前学修】	次回授業部分の資料を事前に読んでおくこと。 次回の授業内容を予習し、用語の意味等を理解しておくこと。					
	【事後学修】	授業中の疑問点をまとめ、関連する文献等を利用し、次回授業までに解決しておくこと。					
	【必要時間】	当該期間に30時間以上の予復習が必要。					
教科書	随時指示する。						
参考書	随時指示する。						
成績評価の方法および基準	レポート50%、口頭試問50%						
その他履修上の注意事項	試験やレポート等に対し、講義中での解説等のフィードバックを行う。 カリキュラムマップのDP1が、この科目と本専攻の学位授与方針との関連を示している。						